粘菌や化石、岩壁からのイマージュによる絵画表現の研究

白井　祥太郎

　万物とコミュニケイトすることで会得した知の領域を絵画空間に定着させるように制作を行っている。具体的には、フィールドワークを通して得た岩壁や化石、粘菌からの着想を、色彩やマチエール、筆のストロークなどに置き換えながら研究を行っている。

　現在、「柔らかなる石」「子実の見立て」「粘菌のユリイカ」を主軸にシリーズを展開。
「柔らかなる石」　…アンモライトなど結晶化した化石
「子実の見立て」　…茸やその粘菌、地衣類などの子実体
「粘菌のユリイカ」…粘菌の中にある知性をイマージュ
どのシリーズも森の中で化石や粘菌を観察し、実際に手で触れ口に含むなど身体を通して考察し、身で交合う事で表出したイマージュをキャンバスに見立て、着床を試みている。

実制作について「柔らかなる石」は、化石（アンモライト）を観察して得られたイマージュを色や形に置き換えるように制作し、有機性と普遍性が主軸になっている。
「子実の見立て」は、菌類や粘菌、地衣類の子実体（茸の部分）からきている。生態の特質や性質による発育の形態と、制作における身体性を重ねるように制作している。
「粘菌のユリイカ」は、朽ち木に居た粘菌の子実体の観察からきている。無臭に近くほのかに残る土の香りや弾力感や苦味など、実際に触れて口にした時の五感ないし六感的経験を線の流れや色面、形に起こしながらキャンバスに着床を試みている。

森羅に広がる生態系は、独自のネットワークを形成し一つの生命を見立て、私を呑み込む。制限から解放された身体は、四肢を拡張させるように自由な線と色彩をキャンバスに与えた。